

ランチョンセミナー1

国民皆歯科健診に向けた歯周病スクリーニング検査の意義 —幸福寿命の延伸を目指して—

高柴 正悟

岡山大学 学術研究院 医歯薬学域
歯周病態学分野 教授



<協賛企業>

栄研化学株式会社

<略歴>

学歴

- 1986年 岡山大学歯学部卒業
- 1990年 岡山大学大学院歯学研究科修了（歯学博士）
- 1990年 岡山大学助手（歯学部附属病院）
- 1992年 米国ニューヨーク州イーストマンデンタルセンター研究員（歯周病学）
- 1994年 岡山大学助手（歯学部）
- 1995年 岡山大学助教授（歯学部，改組後 大学院医歯学総合研究科）
- 1996年 文部科学省在外研究員（米国 南カリフォルニア大学および国立歯科・頭蓋顔面研究所）
- 2002年 岡山大学教授（大学院医歯学総合研究科，改組後 大学院医歯薬学総合研究科，現在 学術研究院 医歯薬学域）

学会等活動

- 日本歯科保存学会（理事，専門医・指導医）
- 日本歯周病学会（常任理事，専門医・指導医）
- 日本口腔検査学会（理事，認定医）
- 日本免疫学会
- 日本炎症・再生医学会
- 日本未病学会（理事）
- 日本予防医学会（理事）

International Association for Dental Research
(2021-22 President of Periodontal Research Group)

International Academy of Periodontology
(2023-24 President)

受賞

- 2021 William J. Gies Award: IADR
- 2009 R. Earl Robinson Periodontal Regeneration Award: AAP
- 2001 学術賞 (Lion Award): 日本歯周病学会
- 1997 Hatton Awards Nominee: IADR
- 1995 The first place of Award in Research Section of the 5th meeting of IAP

抄録

ヒトは一生を通じて共生細菌と共に生活し、そのバランスが取れている状態（Symbiosis）では、細菌群と互いに助け合って健康を維持しています。しかし、バランスが崩れる状態（Dysbiosis）になると、細菌群の比率が変化し、ヒトは病気を発症することになります。Dysbiosis を元の状態に戻すのは難しく、多くの場合、アンバランスな状態でも病気を発症しない「未病」として生活が続けることになります。このような状況を踏まえると、私たちの健康は、常に危うい橋を渡っているかのように、健康、未病、病気の間で揺れ動いているといえます。

特に、局所で持続的に進行する「静かな病」（Silent Disease）は、少しずつ進行し、気がついた時には他の部位や臓器にまで影響を及ぼすことがあります。まさに、ボクシングのボディブローのように、知らぬ間に身体にダメージを与え、気づいた時には症状が深刻化しているのです。このような Silent Disease の代表例が、歯周病です。歯周病は他の病気の進行を助長し、治療を難しくすることもあります。

歯周病を、発症初期から進行期まで、さらには治療後の再発も含めてスクリーニングできることは、国民全体の願いと言えるでしょう。これにより、健康維持や医療費削減が期待できるため、歯科医療関係者のみならず、医療や保健行政の関係者も歯周病スクリーニングの普及を望んでいるはずで、また、パーソナル・ヘルス・レコード（PHR）と連携することで、日本全国どこに移住しても、歯周病の状態を客観的に伝えられ、効率的な歯科治療を受けることが可能になるでしょう。さらに、歯科治療だけでなく、医科治療への好影響も期待されます。

一方で、広く客観的に歯周病のスクリーニングを行うためには、いくつかの工夫が必要です。歯周病の診断は、感染、炎症、組織破壊、機能障害の4つの観点から行われますが、スクリーニング検査では主に感染と炎症に焦点が当てられています。また、スクリーニングをどのように日常生活の中で実施するかも課題です。本セミナーでは、これらの課題を整理し、効果的なスクリーニング技術の開発と、その実用化に向けた考察を行う予定です。